

私の一冊

看護学科 永野ひろ子 先生

ミルトン・メイヤロフ著 『ケアの本質：生きることの意味』

小鹿図書館 : 114/Ma 98 (ゆみる出版)

活かされて生きる、いたわり愛から学ぶ

平成 23 年 3 月 11 日 東日本を襲った未曾有の大震災は、それまでの人々の暮らしを一瞬にして一変させた。これらの出来事は、保健医療専門家に対する人々の期待をそれまで以上に大きく、また、その対応の必要性について広く認識されるようになったのではないかと思う。そして、このような中で看護専門職者は、地域住民に対して何を応え、どう取り組んでいったらよいか今後の課題であると思う。

しかし、昨今、医療の現場(急性期治療中心)ではますます近代化され、患者様を理解するのにコンピューターによるデータを基準にして、その人の訴えや気持ちを聴くという時間は非常に少ないことも事実である。私は看護の初心者現場で教える際、看護の対象を生活体として捉えることを強調しているにもかかわらず、その現場もさることながら医療機器に依存していることが多い。しかし、今回の東日本大震災では医療機器のすべては津波で流されたり機能しない状態であった。それらは何も役に立たず唯一、宮城県、石巻赤十字病院が病院としての機能を残し、地域住民のニーズに対応していたのではないかと思う。その中でナースができることは、目の前の被災者に対してしっかり寄り添い、今の気持ちを深く感じとる心と観察力、洞察力、あきらめないで可能性を信じ支える心であったと思う。これらのことをしっかり見つめ看護とは何か、看護が対象である人を支えること、しかも病んだ“こころ”を支えるということを原点に、これまでの看護のあり方を振り返る時ではないかと考える。

それでは、人が人を支えるとはどういうことか？ 援助とは？ 他人を助けるということは、基本的にはその人が自主的に選んだ方向において、成長出来るようにする過程ではないかと思う。ミルトン・メイヤロフの「ケアの本質 生きることの意味」は、“こころ”に関するケア支援ができるようになるための指針を提供してくれていると思う。

「ケアの本質 生きることの意味」は、Ⅰ. 他者の成長をたすけることとしてのケア、Ⅱ. ケアの主要な要素、Ⅲ. ケアの主要な特質、Ⅳ. 人をケアすることの特殊な側面、Ⅴ. ケアはいかに価値を決定し、人生に意味を与えるか、Ⅵ. ケアによって規定される生の重要な特徴、

で構成されている。

本書でミルトン・メイヤロフは次のように力説している。

「自分以外の人格をケアするには、私はその人とその人の世界を、まるで自分がその人になったかのように理解できなければならない。その人の目でもって見てとることができなければならない。相手の世界で相手の気持ちになることができなければならない。その人にとって人生とは何なのか、その人は何になろうと努力しているのか、成長するためにはその人は何を必要としているのかなどをその人の“内面”から感じとるために、その人の世界へ“入り込んで”いくわけである。」

これらのミルトン・メイヤロフの提言は、看護の現場で看護者が患者の感情的な態度（怒り、恐れ、困惑）、または、拒否的な態度にもかかわらず、患者が一人しかいない、価値のある人間として、無条件に肯定的に受け入れていく態度・行動と重なる部分がある。たとえば、看護者が患者と人間関係の確立を始めるにあたって、患者が自分自身の個人的な恐れ、または不安を体験している最初の面接において、看護者は、恐れを抱かないで友好的な思慮深い、温かい態度で患者に接していくことや、自分のケアの体験において患者の恐れが全く初めての出来事、または、何か新鮮なものとしてであるかのように取り組む時のことなどである。これらのことにより、看護者はその人だけに向けられる注意を、一人一人の患者に対して与えることが可能となり、患者の言語的・非言語的コミュニケーションに耳を傾け、聞き取ったことを看護者自身の言葉で要約して返していくことができるようになる。そして、その時、看護者は、患者の個人的に感ずる世界である内部的照合枠に入ることができるようになる。

また、彼は、次のようにも主張している。

「《しかし、私は成長したいと言う私自身の心からの欲求をよく理解し、それに応えることができはじめて、相手に関しても、その成長したいという欲求や努力が理解できるのである。言い換えれば、他者の中に私が理解できるものは、私が自分自身の中で理解できるものだけなのである。》 だからこそ相手の世界の中で、私は当人を援助することができるのである。私が内面的に彼の困惑を“感じる”がゆえに、私は彼をその状態からたすけ出すことができる位置にいるのである。」

看護の臨床の場で患者をケアする時に、第一に患者との間に人間関係が成立していることが重要である。それは、看護の質が、援助をする側の看護者の働きかけ、かかわり方いかんによって高まったり、低下したりするもので、看護の対象である患者をひとりのかけがえのない人間として接していくか、看護者の患者への理解の仕方に応じて患者への言葉のかけ方が異なってくる。看護は、直接的にも間接的にも常に人々との関係の中で行われるものであろう。確かに、看護を行う側も受ける側も、それぞれが背後の異なる生活を経験してきて、自分自身の考えをもって生きている。したがって、両者の間には考え方の差異と隔たりがあることは事実である。だが、他方、看護という共通な立場でお互いがアプローチする時、両者は人間とし

てお互いに影響しあう関係でもある。そして、看護者が患者の病気を予防したり、困難な病気に立ち向かう時に、看護の中心課題として相互作用を据えるのである。だから、看護者は、患者と共通の目標に向かって進むためには、自分とは異なった他人である患者の抱えている問題を理解しなければならない。しかし、これはかなり困難な問題といえる。それは、人間とは、個別の文化的背景の中で成長・発展してきた個人であり、その経験してきた内容を他人がどんなに理解しようとしても、そこにはおのずと限界があるのではないかと考える。それゆえ、他者を理解するためには、看護者は患者の病気に対する取り組み方、受け止め方を、その患者の見方から理解しようとする態度、すなわち“共感的理解”が必要となってくる。

以上のことから彼らとのコミュニケーションを発展する上で、「共感的理解」は、特に患者の感情や情動を理解していくためには、ますます求められる態度であると思う。筆者は、このたびの大震災では一瞬の内に多くの方が大切な家族を失った、その余りにも凄まじかった被災の光景を思い、亡くなった後の家族への“こころ”への支援のあり方を今一度、問い直し“心”に関するケア支援を深く考えてみる必要があると強く思う。そういった“こころ”に関するケア支援”を学ぶのに、本著書 ミルトン・メイヤロフの「ケアの本質 生きることの意味」は、水先案内となる格好の一冊としてご一読をお勧めしたい。